

優雨

ニタモノドウシ

# 目次

はじめに	4
第一章 嫌悪	5
第二章 困惑	19
第三章 恋心	27
第四章 秘密	36
第五章 幸福	42
第六章 苦惱	53
第七章 転機	66
第八章 決心	78
第九章 平穩	95
第十章 乱心	107
第十一章 終章	118



## ◆はじめに

どうして、私はこんなにもあなたを愛したのでしょうか。

あなたと一緒にいた時間は、あんなにも短かく、後は待つだけの、耐えるだけの、悲しい時間を過ごすばかりだったのに。

でも、辛いだけじゃなかった。幸せもたくさんくれた。

人を好きになる気持ち。心から愛してると思える気持ち。

そしてあなたを思う、そんな自分の心すら愛おしかった。

あなたを愛することは、自分を見つめることでした。

私とあまりにも似た感情を持つあなたを、客観的に、そして主観的に眺めることで、私は自分を見てきました。

ありがとう、ありがとう、そして…

## ◆第一章 嫌悪

「杏子、杏子、ね、もう決めた？」

そう言つて、後ろから抱きついて声を掛けてきたのは、智美だった。

彼女は高校の時から同級生で、同じクラスになったことはなかったが、何となく気が合い登下校を共にする友人だった。

智美の後ろには、同じく高校の時の友人が、数人連なっていた。

「何よ、いきなり。びつくりするじゃない。決めたって、選択教科のこと？まだ決めてないよ。内容もよく分からなかったし」

杏子は、しかめっ面をしながら答えた。

「選択教科？杏子、何言つてるの。私が聞いているのはサークルのこと、サークル」

智美はサークルの部分だけ、やけに強調しながら、興奮気味に言つた。

「サークル？」

「そう、サークルよ！どこに入るの？私はねえ……」

「サークルなんて入る気ないよ。そんな、飢えた女が、ギリギリした目で男探しようなところ」

杏子は智美の言葉を遮りながら答えた。

「また始まった、杏子の男嫌い。モテる女はそんなの必要な

いってこと？そんなこと言わないで、一緒に隣の四大のサークルに入ろうよ、テニスサークルなんだけど」

智美は、杏子の冷たい言葉にもめげずに言つた。

「だ、か、ら、私は入る気ないって」

杏子は、心底嫌そうに答えた。

私立の高校を卒業し、エスカレーター式の女子短大に入学した杏子たちは、今日が入学式だった。

式のと、講堂に残された新入生たちは、必須教科や選択教科、単位や優良可などという話を頭に詰め込まれ、帰路に着くところだった。

みんな、期待と夢で高揚した様子だった。

しかしその高揚は、決して数日後から始まる講義に対するものではなく、サークルに向けられたものだった。智美に限らず、選択教科について関心を持っている友人など、誰一人としていなかった。

彼女たちが通う短大には、近くに姉妹校のような共学の四大があり、その学生が主催するサークルに入る子が多かった。

智美の後ろに連なつた友人たちも、それぞれ違うサークルではあるが、その四大のサークルに入るのだと、口々に話していた。

「じゃあね」

杏子は智美たちに手を挙げて門を出た。

智美はまだサークルの話がしたそうだったが、そんな目線を無視して、杏子はその場から立ち去った。

「サークルねえ…」

杏子はつぶやいた。

智美を初めとして、友人たちの高揚した様子が浮かんた。

杏子にはサークルなんていうものの大事さや楽しさが、さっぱり分からなかった。

そこまでして男探し、女探しがしたいのだろうか？恋人が欲しいのだろうか？異性と接点が欲しいのだろうか？

心の中で自問したが、答えは出なかった。

「もしもし？杏子？久しぶり。私、典子」

典子、通称のんちゃん。

彼女は杏子の小学校の時の友達で、かなりの才女だ。全国的にも有名な某四大に、上位の成績で入学した。

中学に上がる時、杏子は引越したのだが、未だつきあいは続いていて、それはもう一〇年以上になる。

そんな彼女から電話が入ったのは、入学式の夕方のことだった。

「あ、のんちゃん。久しぶりだね。元気だった？」

「うん、元気だよ。杏子ったら、高校も女子校だったのに、大

学まで女子校に行かなくても」

「ま、女の園も、馴れたらそれなりに面白いこともあるよ」

「そう？私には考えられないな。まあ、それはいいんだけど。杏子、前にサークルなんて興味ないって言ってたよね？」

「うん、ないよ。あんなところに入ってまで男探そうと思わないし」

「良かったあ。じゃ、どこのサークルにも入ってないってことだよ」

「入ってないよ。けど、まさかのんちゃんまでサークルの勧誘じゃないよね？」

杏子は、眉間に皺を寄せながら聞いた。

「あ、分かった？」

「入らないよ、私、絶対」

「大学の先輩が作ったサークルで、男はみんなうちの大学の人なんだけど、女の子はいろんな大学から集まって来るの。一度だけでいいから来て。それで杏子が嫌だったら、それきりでもいいから。作つたばかりで人数が少ないんだ」

のんちゃんは、入らないと言つた杏子の言葉など、全く意に介さず話し続けた。

「私、決まつた何かをするのは苦手なの」

「大丈夫、うちは決まつたことをするわけじゃなくて、今日はボーリング、今度はドライブって感じで毎回違うことをする、非常に適当なサークルなの」

「私はいいいよ。悪いけど、誰か他を当たって」

そんな押し問答はしばらく続き、杏子はその後もかなり抵抗した。しかし、結局のんちゃんに押し切られ、次の土曜日のサークルに顔を出すことになってしまった。

「じゃ、楽しみにしてるね」

のんちゃんは、嬉しそうに電話を切った。

彼女の弾んだ声とは裏腹に、杏子の心にはどんよりとした重い空気が流れていた。

約束の土曜日がやってきた。その日のサークルはボーリングだった。

それぞれ自己紹介が終わり、勝負が始まった。チーム対抗で、最下位チームが一位チームのゲーム代金と、あとで行く喫茶店代を払うということだった。

杏子は真剣に投げていたが、他の人はしよせんお遊びとばかりに、ふざけてばかりいた。特に女の子はガーターをとることが宿命のように、溝掃除をしては「やだあ」なんて甘えた声を出していた。

ムツとした顔の杏子を、のんちゃんが少し離れたところで見て、苦笑いしていた。

しかし、甘えた声で身体をくねらす女の子たちよりムカついたので、隣のレーンで投げている男だった。

「遊びなんだからさくそんなに必死になるなよお」

と言ってふざけながら、自分は散々ストライクを出し、杏子のいるチームと最後まで一位を争っていた。

結局、ゲームは杏子がいたチームが二位、隣のムカつく男がいるチームが一位で終了した。

「さあ、人のおごりで旨い茶を飲もう」

と言いながら、靴を履き替えるその男を、杏子は睨むように見ている。

「ねえ、ねえ、杏子ちゃんも彼のこと気に入ったの？」  
同じチームだった恵ちゃんが、男を指さし、杏子の耳元で言った。

「まさか、私がつとも嫌いとするタイプなの。あんなふざけることしか知らないようなお調子者の男」

と反論したけど、恵ちゃんは杏子の話など、耳に入らなかったかのように言った。

「でもね、このサークルの女の子は、ほとんど彼目当てで入ったみたい。特に、ほら、あの子、もうべつたりでしょ？」

彼女があの子と指さした女は、その男に

「新井さん、惚れちゃったわ」

と言いながら、腕にぶら下がるようにじゃれついていた。

あんな女まだいたんだ……と思いつながら、杏子が見ているところに、のんちゃんがやってきた。

「何見てるの？あ、新井さんにぶら下がってる女ね。彼女、私と同じ大学で国文とってる子。でもねえ、話合わないんだ、私

とは。多分、杏子ともね」

のんちゃんは、そう言つて苦笑しながら続けた。

「彼女の家、画廊やつていて、お金持ちらしいよ。ほら、鈴木画廊つてあるじゃない？そこのお嬢様。鈴木は気にしなくもいいよ」

鈴木画廊ならよく知つていた。杏子がつつていた高校のすぐそばにある高級画廊だ。

「気にしてないつて。まだあんな女いるんだなと思つて見てただけ」

杏子ものんちゃん同様、苦笑しながら答えた。

「気にしない？それじゃ、正式にサークルに入る？入つていってことよね？」

「え、いや、そういうことじゃなくて……」

と、杏子がまごつているあいだに、のんちゃんは一人の男の人に駆け寄つた。

「伊藤さん、杏子ね、サークルに正式に入るつて」

伊藤さんと呼ばれた男性は杏子に向かって「よろしくね」と手を振つていた。

杏子の方も、今更引くことも出来ず、会釈した。

しかし、あの嫌な男、新井さんとその腕にぶら下がる女、鈴木さんは、そんなやりとりに見向きもせず、ずっといちゃいちゃしていた。

「靴を履き替えたら、向かいの喫茶店に移動して下さい」

メンバーの男性が、レーンにいるみんなに向かってそう叫んでいるのが聞こえた。靴を履き替えた杏子は、言われた通り、喫茶店に向かった。

みんなが着席したところで、アイスコーヒーとケーキを人数分、と男性が注文した。しかし、ケーキが苦手な杏子は、店員を呼び、自分だけケーキなしで、コーヒーはブラックにして欲しいと小声で注文し直した。

「格好いい！私はブラックで、ですか？いいね、いいですねえ」

声のする方向を見ると、新井さんだった。

『やっぱり嫌いだ、あの男』杏子は彼の言葉を完全に無視しながら、自分のその言葉をぐつと飲み込んだ。

「君、隣のレーンにいた、すごくボーリング上手かった子だね？」

新井さんを睨む杏子に、隣の男性が話しかけてきた。彼はさっきのんちゃんが駆け寄つて、杏子がサークルに正式に参加すると告げた男性だった。

「ボーリング、好きなんですよ」

褒められたことに気を良くして、杏子は笑顔で答えた。

「女の子の中では抜群だったよ。俺なんて一〇〇ぎりぎりだったし。おまけにもう体が痛くて。高校の頃はスポーツ万能、モテモテ青年だったのになあ。あ、俺、伊藤つて言います。よろしく！」



自分を伊藤と名乗った男性は、首を左右にゴキゴキ振りながら笑って言った。

「あ、よろしくお願いします」

杏子は、少し微笑みを浮かべながら言った。

「伊藤！嘘つくなよ。えっと、俺は浅田、よろしくね。俺、こいつと高校のときからずっと一緒だけど、一人にもモテたことなんてありません」

反対側の隣の浅田さんがそう突っ込んできたので、三人は顔を見合わせて笑った。

それからしばらく杏子と伊藤さんと浅田さん、三人で学校の話やボーリングの話で盛り上がった。

サークルなんて、恋人探しのつまらないところかなと思っただけど、それでもなさそうだった。まだよくは分からないけど、みんながみんな、恋人探しにギラギラしているようなところではなさそうだ。

それに普通だと知り合わないような人に出会うことが出来るし、ここから広がる輪が、もっと違う人と知り合うきっかけになるかもしれない。

そういう繋がりは嫌いじゃない。浅めの繋がりは好きだった。ただ、男女共に深いつながりを持つことは、杏子にとって苦手なことだった。

「じゃあ、今日はこの辺でお開きにします。次回のサークルについては、また後日連絡します」

小一時間ほど経ったとき、杏子と話していた伊藤さんが、立ち上がって言った。

喫茶店を出て、それぞれ帰途に着いた。

杏子がのんちゃんバス停に向かって歩いていたら後ろから声がした。

「じゃ〜ね〜、ブラックコーヒーの格好いいお姉さん〜」

その声に振り返ると、腕に鈴木さんがぶら下がったままのふざけた男、新井さんだった。

「新井さんったら！他の女の子なんて見ないでよお」

鈴木さんはそう言いながら、彼の頬を叩く真似をしていた。杏子は、彼らに挨拶をすることもなく、踵を返した。

「ね、あの新井さんって人、いつもあんな感じなの？」

帰り道、一緒にバスを待つのに杏子は、嫌悪感たつぷりの顔つきで聞いた。

「どうだろ？私は学部が違うから、よく知らないけど、サークル発足の会をやった時にはあんなに騒がしくなかったよ。人望もあつみみたいで、他の男子からも頼りにされてるよ。彼、リーダーだし、このサークルの」

のんちゃんは悪気なくそう言った。

「え？あの人のがリーダーなの？伊藤さんじゃないの？やっぱりやめておけば良かった」

杏子はうつむき加減で言った。

「まあまあ、そんな顔しないで。彼には彼の良いところもある

と思うよ。それに、人間二〇人も集まれば、好きなタイプも、苦手なタイプもいるって」

「私、あの人とは仲良く出来そうもないよ。真意が見えないし」

「真意？一〇年以上つきあっても、私には未だ杏子の真意が見えませんか？」

のんちゃんは首をすくめて、おどけながら言った。

彼女のいう杏子については、その通りかもしれないと苦笑いしたけれど、新井さんについての話は何もうなずけなかった。

次のサークルは、居酒屋で懇親会だとのんちゃんから連絡があったのは、初めてのサークルから一週間ほどした頃だった。

乗り気ではなかったが、のんちゃんの立場も考えて、あと何回かは顔を出しておこう、と杏子は決めていた。

「サークルは夕方からだし、昼間にテニスでもしない？」

のんちゃんはサークルの話が終わると、杏子をテニスに誘った。

二人は小学校の頃、一緒にテニス部に入っていた。小学校を卒業して、杏子が転校したあとも、二人は時々コートに立っていた。が、高校に入ってから、のんちゃんが忙しくなり、テニスをするのも久しぶりだった。

まだ四月だというのに、約束したその日は真夏のような暑さ

だった。コートにいる間中、肌がジリジリ焦げ付いていくような、そんな感覚に捕われていた。

テニスを終え、真っ黒に灼けた自分を見て杏子は驚いた。炎天下、数時間もコートにいたのだから仕方ない。

その日、杏子は生成り色のワンピースを着ていた。全体が生成り色で、襟の部分とベルト部分だけに黒のアクセントが入っているワンピース。

そのワンピースは、杏子にとって、一番お気に入りの一枚だった。

「真っ黒に灼けた肌は、もしかするとこの生成り色のワンピースに合うかもしれないな」

杏子は独り言を言いながら、ロッカールームで着替えた。

夕方、のんちゃんと居酒屋に向かうと、他のメンバーは全てそろっていた。

「適当に座っていいよ」

という声が聞こえたので、空いている席を探して、杏子は思わず「え？」と声をあげた。

あの嫌な男、新井さんの横しか空いていなかったのだ。彼の左隣は当然のごとく、鈴木さんが陣取っていた。

ボーリングの時、同じグループだった恵ちゃんに、ことの経緯を聞いてみると

「あ、新井さんの隣ね、初めは他の子が座っていたの。だけど、鈴木さんがあまりに新井さんにべたべたするものだから、

嫌気がさして、別の席に移っちゃったのよ」

と、しかめつ面で教えてくれた。

そういう事情なら、新井さんの横に座ったところで、彼は鈴木さんと話すのに忙しく、自分に構うこともないだろうと思いい、杏子は空いているその席に座ることにした。

案の定、鈴木さんは自分が食べることをそつちのけに、新井さんの料理をお皿に盛っては

「はい、新井さん。これ美味しいよ。私もさつき食べたんだけど、すごく美味しかったからとつてあげたの」

などと言いながら、甲斐甲斐しく面倒を見ていた。

「はいはい、良かったですね、美味しくて」

杏子は声に出せない言葉を、心の中でつぶやきながらそつぽを向いた。

しかし、そんな杏子に新井さんは声をかけてきた。

「ねえ、ブラックコーヒーの格好いいお姉さん、飲んでる？」

「飲んでますので、どうぞおかまひなく」

そんな杏子の素っ気ない態度にもめげず、新井さんは続けて質問をしてきた。

「君、大人しいね？ボーリングの時も静かだったし。どこの大学だっけ？出身は？」

「別に大人しいわけではないです。それから南のはずれにある、誰も知らないような短大に通う、地元の間人です」

冷たく答えてやれば、そのうちあきらめるだろうと思つたの

に、彼は嬉しそうに続けた。

「南にある短大つて、もしかしたらあそこ？俺の家のすぐ近くだよ？俺の家はね……」

などと聞いてもいないのに、自分の家の説明まで始めた。

サークルは乗り気がしないので大人しくしているけど、杏子は普段、決して大人しい人間ではなかった。

いつも賑やかに大騒ぎする女で、コンパやパーティをするときには、たいいていの場合、幹事だった。もちろん、それは杏子の明るさを知つてのことで、彼女なら楽しませてくれると、みんなが思つていたからだった。

人が集まる場所には、必ずいる『場を盛り上げるだけのピエロの役回り』それが杏子だった。

但し、それは仮の姿。

本当は、賑やかなことは苦手だった。全てのことを一歩引いたところで、冷めた目でしか見る事が出来ない女。

だからこういう自分に似通つた、賑やかなピエロ男の真意を探つてしまふ。そして探つてしまふ自分に疲れてしまふので、得意ではなかつたのだ。

つまらなそうに答える杏子の態度にもかまわず、新井さんは話し続けた。

当の新井さんの向こう側では、鈴木さんがしきりに彼に話しかけていた。

「お隣の彼女、あなたと話したがってますよ。私なんかにかまつてる暇があつたら、お隣と話されたらいかがですか？」

杏子は冷たく新井さんにそう言い放った。

「いや、実はね、あの子、苦手なんだ」

新井さんは杏子の耳元で答えた。

「苦手なら苦手だつて言えればいいじゃないですか？あなたがおんなにいい顔ばかりするから、彼女、勘違いして……」

そこまで言いかけた時だった。新井さんはくるつと鈴木さんの方を振り返つて言った。

「あの子、俺ばかりと話しても、仕方ないでしょ？もつと他の人とも話さなきゃ」

その言葉を聞いて、鈴木さんはすごい形相になった。しばらくすると涙目になり

「ひどい……そんな風に言わなくても」

と言いつ返したが、新井さんは

「だつてそうだろう？いろんな人と会話するために、このサークルも親睦の場もあるんだから。俺だつて他の人とも会話しただいし、鈴木さんばかりかまつてるわけにもいかないんだよ」と、ムツとしてゐる様子だった。

『本当に言っちゃつたよ、この男』

杏子はあんなこと言わなければ良かったと思つたが、後の祭りだった。

しかし、そんな感情とともに、心はずつきりしていた。

『よし！よく言つた、君は』

と、あんなに毛嫌いしていた新井さんを、心の中で褒め称えた。

鈴木さんがしくしく泣き出したのを見て、他の男の人は必死でフオーロしていた。

「新井、そんな言い方ないだろう」

と新井さんを責める人もいたが、彼はますますヒートアップして

「そんなこと言つても、俺、この前のボーリングの時から、ずつとつきまとわれて、正直困つてるんだ」

とまで言つてしまった。

その言葉を聞いて、鈴木さんは泣き声を一段と高くした。

彼のことを、一端は褒め称えた杏子だったが、目の前の状況はだんだん修羅場と化してきた。

そして、ますます見抜けぬ男に、杏子は戸惑いが隠せなかつた。

その後、鈴木さんは子供のように泣きじゃくりながら帰つてしまった。

お酒が入つていたこともあつて、鈴木さんが帰つてしまったことを気にする人はいなかった。彼女が去つた後、場はすぐに元の賑やかさを取り戻した。

新井さんとはというと、鈴木さんのことなど全く意に介する様子もなく、杏子に話し続けた。

「あそこに顎の長い男いるでしょ？あいつ阿保っていうんだけど、漢字で書くとこぎとへんに可能の可、保険の保なの。俺が、アホ君？って呼んだらあいつ、本気で怒って、ボクの名前はアホじゃなくてアポです！って頭から湯気出しながら言うの」

その下らない話が何故かつポにはまって、杏子はプツと吹き出してしまった。

「お！やつと笑ってくれたね」

新井さんはそういつて、杏子の手をとり握手しながら思いっきり振った。

そのうち考えるのも馬鹿馬鹿しくなり、杏子も彼と一緒に、いつものように大騒ぎする始末。いつもと違うのは、ピエロが二人いることだった。

大騒ぎはどんどん広がり、そんな二人のピエロが馬鹿な話をする周りに、サークルメンバー全員が集まってきていた。

そんな中、二人の会話を聞いていた、新井さんにアホ君と呼ばれた阿保さんが言った。

「ね、この二人、似てない？」

そこへ、のんちゃんが口を挟んだ。

「ということは、新井さんもいつも楽しげにやってるけど、本当は何考えてるか分からない人？本性見えないっていうか」

「そうそう、まさしく新井もそんな男だよ。俺たち高校の時から

一緒になんだけど、未だにこいつの心中さっぱり分からないし」

阿保さんも、隣にいた伊藤さんも賛同した。

『客観的に見れば似てるらしい、私たち。ということとは、ピエロは私と一緒に飯の姿か』

杏子がそんなことを思っているとき、また違う誰かが言い出した。

「この二人、顔も似てない？」

そう言われて杏子と新井さんは向き合った。二人が顔を見合わせたのは、それが初めてのことだった。

見つめ合った目が離れた瞬間、新井さんが言った。

「そうなんだよ。実はさ、内緒にしていたけど、俺たち兄妹なんだよな？」

「そうそう、兄妹なの。ね、お兄ちゃん」

調子に乗って、杏子が応えた。

結局、杏子が彼に向かって「新井さん」と呼んだことは、それ以前もそれ以降もなかった。

その日から杏子は、彼のことをお兄ちゃんと呼ぶことになる。

その呼び名が、いつまでもいつまでも杏子の心に残ることになるとは、このとき、まだ知るよしもなかった。

「あの…申し訳ありませんが、次のお客様もありますのでそ

そろ……」

居酒屋の店員が、申し訳なきそうにそう言ってきた時には、すでに終了予定時間を一時間も過ぎていた。

「じゃ、そろそろお開きしようか」

お兄ちゃんの言葉で、みんな店を出た。

居酒屋の前の歩道は少し狭く、追い出された面々が大騒ぎしている横を、通行人が迷惑そうな顔で通っていくのが見えた。

「他の人の迷惑になるからみんな早く帰れよ。それともう遅いから、駅から遠い女の子は男が送って行ってあげろよ」

お兄ちゃんはみんなを促した後

「おまえは俺が送っていくから、心配しなくていいよ」

と、杏子の耳元で告げた。

杏子がぼつぼつと話し始めた頃、彼は杏子の家の場所を聞いていたので、自分の家とそう離れていないことを知っていた。

杏子たちは、みんなが去っていくのを見送った。

全員が帰ったところで

「さあ、じゃ、俺たちも帰るか」

と、お兄ちゃんは振り返って言った。

二人は居酒屋の近くからバスに乗り、電車の駅までたどり着いた。

しかし、バスに乗った後も、駅で電車を待っている時も、お兄ちゃんはほとんど口を開かなかった。

「お兄ちゃん、どうしたの？気分でも悪いの？」

気味が悪くなつて杏子は聞いた。

「いや、そんなことないよ。どうして？」

「だって、あれだけ大騒ぎしていたのに、今はこんなに静かだし」

「ああ、サークルでの大騒ぎね。あれは表面上の俺。今が本当の姿かな。A B型だから二重人格なのかもね」

と言つて笑つた後、少し真面目な顔をして語り始めた。

「俺、本当はあんな騒ぎは苦手なんだ。けど、人に腹の底を見られるのが怖くて、ピエロ役をやつてる、多分。中学の頃、おやじを亡くしたんだけど、父親がいないことで、周りから変な同情受けたりして。でも辛い時に辛いだろうって思われるのが、何だか癪でね。だから、自分を見破られないようにするために、いつも馬鹿やつてるんだよ。癖みたいなものかな」

『まるで私？』

杏子は親を亡くした訳ではなかったが、何度となく人に裏切られ、どん底を味わつてから、老若男女問わず、人を信用出来なくなつていた。

だから自分の真意を隠して笑顔を作り、賑やかに騒ぐことで、周りに心中を察知されないようにしていた。

彼も同じなの？

杏子は自分と同じような考えを持った人に、初めて出会つた気がした。

本当は初めてではなかったのかもしれないが、心中を隠してき  
た杏子に、そういう話をしてくれた人なんていなかった。まし  
て自分をさらけ出してみよう、と思える人もいなかった。

そんな会話をしているうちに電車が来たので、二人はそれに乗  
り込んだ。乗客はまばらだった。座席はほぼ空席だったのに、  
杏子たちは二人とも座らず、入り口付近で立っていた。

ドアが閉まり電車が走り出した時、杏子は口を開いた。

「さっきの話なんだけど。そんな話、何で私にするの？ 出会っ  
て間もない、知り合いに毛が生えた程度の私に、腹の中、見せ  
るような話していいの？」

お兄ちゃんは少し考えてから答えた。

「何でだろう？ あいつらが言ったように、おまえが俺に似てる  
からじゃない？ おまえだったら、俺の心中、理解してくれるよ  
うな気がしたんだよ。きつと、どこかで」

「私、そんなにお利口さんじゃないよ」

と杏子は答えたが、その言葉を聞いて、彼は少し微笑みだけ  
だった。その後はずっとドア越しに流れる、夜の風景を見てい  
た。

そのうち電車は杏子の降りる駅に到着した。

「私、一人で帰れるから大丈夫だよ。お兄ちゃんはこのまま電  
車に乗って帰って」

彼の家は、そこからまだ二駅先であることを杏子は知っていた

ので、そう促した。

しかし、彼の方は聞かなかった。

「いいよ、俺が送るって言ったんだから送るって。おまえん  
ちド田舎だろ？ ここから歩いて何分あるんだよ」

お兄ちゃんはニヤニヤ笑いながら言った。

「ド田舎って失礼な。お兄ちゃんなんてそのド田舎よりまだ  
奥じゃない」

杏子はふくれながら言った。

「奥って言ったって俺んちは、こんなド田舎じゃないよ」

お兄ちゃんは駅の周りを見渡しながら言った。

静かだった杏子たちは、いつの間にか居酒屋での二人に戻りつ  
つあった。

ホームでそんな会話をしているうちに、電車は行ってしまっ  
た。

二人は改札を通過して外に出た。

杏子の家は、お兄ちゃんが言うように田舎にあって、帰り道は  
かなり暗い。消えそうな電灯がまばらに見える程度で、人に  
会うこともほとんどない。

そんな暗い道を二人で歩いていたら、遅咲きの桜だろうか、生  
暖かい風に吹かれて花びらがヒラヒラと舞っているのが見え  
た。

「まだ、桜、咲いてるんだね」

杏子の言葉に、お兄ちゃんが言った。

「来年の春は満開の桜でも見に行くか、弁当持って」

「うん、いいね」

いつもならそんな言葉に、相づちを打つような杏子ではなかったのに、その日は素直にそううなずいた。

「おまえ知ってる？うちのサークルの男ども、ほとんどがおまえ狙いらしいぞ」

お兄ちゃんの言葉に、杏子は吹き出しながら答えた。

「それなら、女の子は、ほとんどがお兄ちゃん目当てらしいよ。ボーリングの時、恵ちゃんが言ってた」

「そりゃ、良かったです。どうでもいいことだよな、お互い」

「ホントだね」

本当にどうでもいいことだった。

きつと彼の方も、杏子と同じように、サークルに恋人を求めていた訳ではなかったのだろう。

「そうだ、言い忘れてたけど、俺の妹の名前、おまえと同じキョウコなんだよ。うちの妹の字はミヤコの京子だけだね」

お兄ちゃんが言った。

「じゃもし私がお兄ちゃんと結婚したら、お兄ちゃんの妹さんと私は同姓同名になるんだ？」

「ああ、そういえばそうだね。それで、妹と同じ名前のおまえが気になって、初回のサークルの時から機会を狙って、その話

しをしようと思っていたのに、おまえ、ずっと機嫌悪くて。それも他の奴らとは楽しそうに話しているのに、俺が声をかけたら、途端に機嫌が悪くなるから。俺、何で嫌われてるんだろうって悩んでたんだ」

お兄ちゃんは首をすくめ、笑いながら言った。

「だって、お兄ちゃん、いっつもふざけてばかりで真意が見えなかったからね。私と一緒に、ピエロは演技なのか、それとも、それとも……って考えていたら、なかなか話せなかった。それに、もしお兄ちゃんが私と同じ考えをもった人なら、お互い近寄らない方がいいかもしれないって思ったし」

「なんで？似ているからこそ、分かり合えるんじゃないの？」

「分かり合えても、駄目なこともあるよ。お互いが分かりすぎて、余計傷つくことってあると思う」

「うくん、俺には理解不能だなあ」

お兄ちゃんは苦笑いだった。

分かり合えるからこそ、ついてしまう傷。

杏子はそのとき、何気なくそう言っただけで、そのときはまだ本当にそうなるとは、夢にも思っていなかった。

そして、似たもの同士でつけた傷は、どうしたって消えないというこゝも。

多分、今ここでこうやって話してる彼が、本来の彼なのだろう



う、杏子は思った。

静か過ぎず、騒ぎ過ぎず、相槌を打ちながらお互いの様子を伺う二人。

しかし、その伺いは、いつものように嫌らしい影を見るようではなく、ただ相手を知りたい心から来るものだった。

ふと、杏子は思い出し笑いをした。

「何がおかしいの？」

彼は杏子の顔をのぞき込んで聞いた。

「私ね、初めてのサークルでボーリングした時、大嫌いだったと思ったの、お兄ちゃんのこと。もっと言えばさつき居酒屋で隣に座ったのも、他に空いている席がなくて嫌々だったんだよね」

「なんだよ、それ。ひどいな。俺、まだおまえと一言も話してないのに？」

「うん、そう。けど、あのときの自分が、今こうやってお兄ちゃんに送つてもらって、こんな話してるのかと思つたら、人生何があるのか分からないんだなって」

「それはいいことなの？悪いことなの？」

「今のところはいいことかな。そのうちどうなるか分からないけど」

「一寸先は闇、とも言うからね」

二人は大声で笑った。

杏子は、今まで誰かとこんな会話をしたことがなかった。

いつも、たいていは口を開いていた。

友達の口から出る話は、フアッションだのタレントだの、杏子には興味の持てない話ばかりだった。しかしその話に乗り、それが楽しいフリをした。

時には、先頭に立ってそんな話をした。

それは他でもない、自分の心中を知られないようにするためだけの、まさに演技とも言える会話だった。

そして人に向けて笑顔は、いつも厚すぎる仮面を被った顔だった。

悩みなんで一つもありません、というような、楽天的な態度は、実は杏子の抱える本質の真逆だった。

そんなことをして意味があるのか、よく分からなかったけど、本当の自分を誰かに知られるのが怖かった。

しかし、その日の杏子は、笑いたくて笑っていた。そして、話したくて話していた。

それは仮面の笑いではなかったし、心の底から楽しかった。

今まで男女ともにそんな人に出会ったことはなかった。

表面上仲良くしている友人もいたが、心底の話をしたことはなかった。

もちろん、自分の寂しさや苦しきや辛さや、そんなものを見せたこともなかった。

楽しい時間は、あっという間に過ぎてゆき、杏子の家に着いて

しまった。

「うち、ここなの。ごめんね、また三〇分も歩かせることになるけど」

「大丈夫。今日は話せて良かった」

「こちらこそ、ありがとう。気をつけて帰ってね」

杏子がそう言つて玄関の扉を開けようとしたとき、お兄ちゃんが声をかけた。

「また今度電話するよ。じゃ、おやすみ」

杏子は笑いながら手を振った。

彼も手を挙げて帰って行った。

そのとき、杏子の心は切ないという感情を抱いていた。

それは生まれて初めての感情だった。

## ◆第二章 困惑

「また電話する」

杏子は、そんな社交辞令のような言葉を、真に受けた訳ではなかった。

しかし、その電話はちゃんとかかってきた。

お兄ちゃんに、自宅まで送ってもらったあの日から、数日後のことだった。

「もしもし？よ、俺」

「俺って誰？」

「俺だよ、俺。いろんな男たちからいっぱい電話がかかって来るから、俺の声なんて覚えてもいないってこと？」

「あゝお兄ちゃん？」

「あゝって何だよ、嫌そうな声して」

「ごめん。それで？」

「それでって……この前、家まで送って行った時、今度電話するって言っただろ？」

杏子は驚いた。

社交辞令だと思っていたあんな言葉を、彼が実行するとは思っていなかったからだ。

これまでそんな人はいなかった。

また電話する、また行く、そんな『また』は、いつまで経って

もやってくるはずもない、置き去りにされた約束だと思っ  
たし、これまでもずっとそうだった。

杏子が言葉に詰まっていると

「何、どうしたの？今、電話しちゃマズかった？切ろうか？」

お兄ちゃんが心配そうに聞いた。

切りたくはなかった。しかし『また電話するなんて言葉、社交辞令だと思っていたから驚いた』なんて言うのも悪いと思  
い、言葉を言いあぐねていた。

「え、いや、大丈夫だよ」

「だったらいいんだけど。何だか言葉に詰まっているみたいだから、電話したのが不都合だったかと思つて」

何か会話を続けなければ、と杏子は次の言葉を探した。

「あ、あのね、ちょうど良かった。私、お兄ちゃんに相談があったんだ」

「何だよ、俺で相談に乗れるようなことだったら言ってみて。あ、でも金の話は駄目だよ。逆さにして振つても出てこないから」

お兄ちゃんは笑いながら言った。

「そういうことじゃないけど。うん、でもいいや」

「何だよ、気になるじゃないか」

「いいの、本当に気にしないで」

相談なんてなかった。

しかし、用事がなければ電話は切れてしまう。それをつなぎ止

めておくためだけのでまかせだった。

「電話じゃ、話しくいか。そうだよな。分かった、じゃ、時間で作れる時にまたそっちに行くよ」

お兄ちゃんは勝手に、電話だから言えないのだと解釈したようだった。

「ごめんね。つまらないこと言って」

「なんの、なんの、俺はお兄ちゃんだからな。じゃ、また連絡するよ」

「うん、じゃあね」

電話は切れてしまった。

続いていても、話すようなことなど何もなかった。それでももっと話していたかった。

電話が切れた後も、杏子はぼんやりしていた。切れた電話の余韻が少し寂しかった。

それから一時間ほど経った頃だろうか。またお兄ちゃんから電話があった。

「俺だけだ。今、おまえんちの前。相談したいことがあるなんて、よほどのことじゃないかと心配になって来てみた」

「ホント？すぐに降りるから待ってて」

階段を駆け下り、玄関に飛び出した。

表には紺色の車が止まっていて、お兄ちゃんが中から手を振っていた。

杏子は、滑り込むように助手席に乗り込んだ。

夕暮れ迫る空の下、車はゆっくり動き出した。

車に乗った杏子は、何を言っているかわからず、しばらく黙り込んでいた。

傾きかけた太陽が少し眩しかった。

「この車、一年前に新車で買ったんだよ。我が家では、新車を買うなんて一大イベントなんだ。だからこの車がうちに来た時、すごく嬉しくてね」

お兄ちゃんがそんな話を切り出したことで、沈黙した場が少し和んだ。

「そうなんだ。私ね、車が大好きなの。でもまだ免許持ってなくて。だから夏休みになったら、すぐに教習所に通おうと思って、もう申し込みしてあるの」

杏子もその話に乗った。

「俺はね、バイクの免許も持つてるんだよ、中免だけだ。本当は四輪より二輪の方が好きなんだ。ほら、Arariってヘルメットのメーカーあるでしょ？俺と同じ名前だから、そのメットに興味持って、メットからバイクって感じてね。本末転倒っぽいけど」

お兄ちゃんが笑いながら言った。

「バイクも乗るんだ？気持ちいいんだろうなあ。私も乗ってみたいよ」

「今はもう手放しちやつてないんだけど、もしまたバイクを手に入れたら乗せてやるよ」

「ホント？楽しみにしてる」

会話がなかつたらどうしようかと杏子は、これらの会話で、やつと平常心を取り戻した。

相談があると持ちかけた話は、すでに忘れそうになっていた。

「この前はごめんね、遠いところまで送ってもらつて」

「実はあのあと大変だったんだ」

「え？何かあったの？」

「おまえを送つて、駅に戻つたら、次の電車、一時間後で、おまけに終電」

「嘘？」

「ホント、ホント。おまえんち、田舎だから時間つぶすところもないし、おまけに帰れなくなるところだったよ」

「ごめんね；そんなことになつてたとは思わなかつた。やつぱり一人で帰れば良かったね」

「俺が送るつて言つたんだから、気にしなくていいよ。つて自分で言い出しておいてそんな言い方はないか」

お兄ちゃんはそう言つて笑つた。

まだ、相談のことは頭から離れていた。

「そうそう、それで？相談したいことつて何だったの？」  
と彼が聞いてくるその時まででは。

杏子の顔から笑顔が消えた。

どうしよう。相談、相談……  
頭の中で念仏のように唱えてみたが、何も浮かんでは来なかつた。

杏子は本当のことを話そうかと思つた。

実は相談することなんて何もなかつた……と。  
でも、それでは彼が急いで駆けつけてくれたことが無駄になつてしまう。

杏子は仕方なく、一つだけあつた悩みのようなものを口にした。

「実はね……高校の時からつきあつてた彼がいたの」

「彼氏いるんだ。そうだよ。で？」

「いるんじゃない、いたの。昔の話。過去形。高校を卒業した時に別れたんだ」

「おまえがフツたんだろ？」

「そう……なるかな。その彼から、この前電話がかかつてきて、またつきあわないかつて」

「うん、それで？」

「別れるのつて理由があつてじゃない？彼とは、どれだけ寄り添つても無理だと思つた。彼と私は、あまりにかけ離れたところにいるの。一年ほどのあいだに何度かつきあつたり別れたりしたんだけど、そうしてうちに分かつた。友達としてなら上手くいく。でも恋人としてはどうしても駄目」

「この前、似ていても、分かり合え過ぎて駄目なことがあるって言ったじゃない？」

「よく覚えてたね。そうなんだけど、だからといって、あまりに違いすぎるっていうのも駄目だと思わない？」

お兄ちゃんは少し難しそうな顔をしていた。

「本当に駄目なのか、もう一度考えてみろよ」

「一度狂いだした歯車は余計壊れていくばかりなんだよ。傷つけ合うばかり。彼には好きな人が出来たって言ったからあきらめてくれるとは思うんだけど……」

その言葉にお兄ちゃんは急ブレーキを踏んだ。

お兄ちゃんが、あまりに突然ブレーキをかけたものだから、杏子は前につんのめった。

しかし彼はそんなことおかまいなしに、怒鳴るように言った。

「好きな人？」

「い、いや、言葉のアヤというか、何というか……」

杏子のしどろもどろの言葉に、お兄ちゃんは車を路肩に止め、少しあきれた顔で言った。

「つまり嘘ついたってことか？あんな……それは最低の逃げ口上だよ。相手の男だつて惚れた相手に好きな人がいると聞かされたらショックだし、あきらめようとするとと思う。でもそんな嘘つかれてたつて分かったら、どんな傷を負うか考えたことがあるのか？」

お兄ちゃんの叱責を受けながらも、杏子は少しムツとした。

騙すつもりなんてなかったのに……と。

杏子は冷静な顔をして、言い訳の代わりにため息を一つついて言った。

「好きな人なら、いるよ」

「嘘つくなよ。誰だよ」

しばしの沈黙の後、真つ直ぐに彼を見て杏子は言った。

「あなたよ、お兄ちゃん」

『おいおい、下手な冗談やめてくれよ』と笑つてくれるお兄ちゃんを、杏子は勝手に想像していた。

彼がそう言って笑ってくれたら『ごめん』と謝るところだった。

しかし、彼はピクリとも動かなかつた。

二人の間には、不穏な空気が流れていた。

「お兄ちゃん？どうしたの？」

あまりに黙り込んだままの彼に、杏子は顔をのぞき込んで聞いた。

お兄ちゃんの顔は真つ赤だった。

初めは夕日に照らされているのかと思つていた。

でも違う、絶対に違う、とその後杏子は確信した。

「う、嘘……だろ？」

それは、杏子の偽りの告白に、明らかに動揺した、顔つきと言

葉だった。

そんな人だとは、思ってもいなかった。

恵ちゃんが言っていたように、彼はサークルの中でとても人気だった。

杏子自身も、初めてのサークルでの自己紹介の時、お兄ちゃんを見て『あの人、いいんじゃない？』と密かに思った。

少し照れながら、でも一生懸命自己紹介する姿は好感が持てた。

それに、笑った時もすましている時も、整っていて可愛いあの顔は、文句のつけどころがなかった。

でもその後、大騒ぎする彼の真意が、どこにあるのか分からなくなり、関わらない方が無難だと思った。

その上、彼に近寄る女の子を見てげんなりした。そうして杏子にとって、お兄ちゃんはいつの間にか敵視する相手にまで、ランクダウンしてしまった。

モテるに決まっている男。それを内心、自慢している男。そんな像を勝手に作り上げてしまっていた杏子は、自分の偽の告白に激しく動揺する彼の姿を見て困惑した。

でも、彼の「嘘だろう？」の言葉にはすでに首を縦に振ることが出来なくなっていた。

嘘だったけど嘘じゃなくなったような気がする、そんな曖昧な状態だった。

「好き」という嘘の告白に、ここまで動揺する、そんな彼に杏子はその時、墮ちた。

冗談とは言え、自分から好きだなんて告白したのは、杏子にとって、これが最初で最後のことだった。

杏子は、ある恋に破れ、恋する心を失っていた。

元々人間不信だった杏子にとって、やっと出来た、親友でもあり、恋人でもあったその男に、二股かけられて裏切られたことは、かなり大きな傷となって残っていた。

それ以降、どんな人につきあっても自分をさらけ出すようなことはしなかった。というよりも、人を信用する心や、好きになる心を失っていた。

お兄ちゃんに相談した彼のことも、それなりには考えていたけど、とてもじゃないが恋をしていたなんて言えない状態だった。

破れた恋で負った傷が、まだ生乾きの杏子にとって、次の恋がいつやってくるのか、そしてその恋に上手く乗れることが出来るのか、恋から少し離れたところで傍観し、まるで他人事のように見るくらいしか、恋をする方法を知らなかった。

そんな私が、たった今あなたに恋をしました、なんて本気な訳がないと、自分に言い聞かせた。

どれだけの時間が経ったか分からなかった。二人の間に、会話

は全くなかった。

カーラジオからは何か流れていたと思うが、それが音楽だったのか、会話だったのか、そんなことすら、解らなかつた。

「そろそろ帰らないと…」

お兄ちゃんが言った時、真つ赤に染まつた空はとつくに消え果てていた。

彼は、シフトをパーキングモードから、ドライブモードに入れた。ターンシグナルを右に出し、車は静かに道路に戻つていった。

走り出してからも、やはり二人の間には、会話がなかつた。

重苦しい雰囲気の中、車は杏子の家に着いた。

「あ、の…ありがとう」

杏子は一言だけそうつぶやいた。

「またね」が普通のさよならの挨拶なのだろうけど、その「また」があるのか、ないのかも分からないような状況だったから、そんな言葉しか出てこなかつた。

「あ、あのさ」

ドアを開けて車から降りようとしている杏子に、お兄ちゃんが声をかけた。

「さっきの彼のこと、ちゃんと考えてあげろよ。彼は彼なりに、おまえのことを思つてるだろうし。おまえもその思いに応えられないとしても、もう一度ちゃんと考えなきゃ駄目だと思

うよ」

「うん、そうだね」

「よし、それでこそ、俺の妹だ」

妹…か。やつぱりね。彼の中で、私は妹以外の何でもないんだな。

そんなことを思いながら、杏子はドアを閉めた。そして運転席の方から彼を見送ろうと思つた時、ウインドが開き、お兄ちゃんが言った。

「さっきはごめん。おまえはちゃんと好きだつて思つてくれていたんだよね？なのに、勝手に嘘だとかひどいこと言っちゃつて。突然で、何を言つていいか分からなかつたんだ。でも、ありがとう」

そう告げると、杏子の言葉を聞かずに、車は走り出して行つてしまつた。

車が視界から消えていった後も、杏子はしばらく呆然としていた。

何を言つてしまつたのだろう、私。

彼はどう思つたのだろう。

次に会う時、どんな顔して会つたらいいの？

夢の世界から現実へと戻ってきた杏子は、疑問と後悔と困惑と、そんなものが入り交じり、そこから先に進めなかつた。

ただ、真つ赤になつたお兄ちゃんの横顔だけは、これから先もずっと忘れることはないだろうと思つた。



あの唐突な告白以来、お兄ちゃんからの連絡はなかった。困っていたのか、避けられていたのか、それは分からなかった。

でも一つだけ言えることは、彼には、杏子を好きだという気持ち、毛頭なかったのだということ。もし、少しでもそんな気持ちがあれば、電話の一本くらいあるはずだ、と杏子は思っていた。

そんな思いを抱えたまま半月が過ぎ、次のサークルの日がやってきた。

その日のサークルは、ドライブだった。

車を持っている男性四人が、自らの車を運転して、待ち合わせ場所にやってきた。

ボーリングの時のように、チーム分けがあり、くじ引きで誰がどの車に乗るか編成された。

よりによって、杏子はお兄ちゃんの車に乗ることになってしまった。

助手席には伊藤さんが乗っていて、杏子と久美ちゃんが後部座席に乗った。

「じゃ、出発するぞ〜」

お兄ちゃんのかげ声で、四台の車は一斉に動き出した。

伊藤さんと久美ちゃんは、これまでのサークルの話や、学校の話でワイワイやっていたのに、お兄ちゃんと杏子は静かだった。

その光景をおかしいと思ったのか、伊藤さんが言った。

「おい、新井、杏子ちゃんも、今日はやけに静かだな。居酒屋の時の元気はどこに行っただ？」

「ホント、どうしちゃったの？」

久美ちゃんも伊藤さんの言葉にうなずきながら言った。

「運転手は黙って運転しないと。事故でもしたら大変だからね」

お兄ちゃんはそう言って笑った。

黙り込んだままで、変に思われるとマズいかなと思った杏子は「あ、この前は遠いところ送って頂いてありがとうございまして」

と、居酒屋の帰りのお礼をお兄ちゃんに言った。

お兄ちゃんも、杏子の気を遣った言葉に反応して

「いえいえ、女性を送るのは当然のことですからね。僕は紳士ですの〜」

と、戯けたように言った。

そのとき、杏子はルームミラー越しにお兄ちゃんと目が合ってしまった。慌てて下を向いた。

それ以降、また杏子とお兄ちゃんのあいだで、会話は途絶えてしまった。

杏子は、その後ずっと、あの時、自分が座っていた、そして今は伊藤さんが座っているお兄ちゃんの車の助手席を、少し不思議な気持ちで眺めていた。

車は山道を登り、キャンプ場のようなところに着いた。

「それじゃ、お昼にしようか」

そんな言葉が聞こえ、コンビニで買ったお弁当が、みんなに配られた。

「弁当とお茶は新井が買ってきてくれたので、それぞれ彼にお金を払って下さい」

伊藤さんの言葉を聞いて、みんな一人ずつお金を払いに行った。

しかし、杏子は財布が鞆の奥に入り込んでしまっ手間取り、最後の支払者になってしまった。

周りを見るとみんなすでに座ってお弁当を食べ始めていた。

「あの：いくらですか？」

杏子がお兄ちゃんに声をかけると、彼は

「いいよ。おまえからお金をもらう気はないから」

と言って立ち去った。かと思うと引き返してきて

「その白々しい敬語はやめろよ。それと、この前のことは、お互い気にしないようにしような」

と、肩にポンと手を置き、行ってしまった。

その「気にしないように」という言葉をどう理解したらいいのか、杏子はお弁当を食べながら、ずっと考えていた。

おまえから聞いた告白は、なかったことにしようということなのか、聞いたけど、今日は気にしないでおこう、ということなのか。

杏子は、その後もずっとそのことを考えていた。だからお弁当を食べた後、何をして遊んだのか全く思い出せなかった。

覚えているのは、夕方近くになって、急に大雨が降ってきたこと。

早めに切り上げようということになり、みんな慌てて近くにあった車に乗った。行きとは違う車に乗った人も多く、杏子も帰りはお兄ちゃんの車に乗ることはなかった。

結局、あれつきり彼と話しをすることはなかった。

ちよつと寂しいような、でもホツとしたようなそんなサークルの一日だった。

### ◆第三章 恋心

あのサークルの日の大雨は、梅雨入りのサインだったらしく、その後、毎日雨が続けていた。

杏子は、講義を受けながらも、ぼんやりと外を見ながら、窓を伝う雨の滴を数える日々を過ごしていた。

そして前期の試験になり、しばらくサークルは休みになった。会えないことが良いような悪いような、寂しいような、でも会いたくないような…

そんな曖昧な心を抱えながら、夏休みはやってきた。

のんちゃんから次のサークルの連絡が入ったのは、夏休みに入ってすぐのことだった。

「七月最後の日曜日、サークルがあるんだけど、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

のんちゃんの問いかけに短く返事をした。詳細は追って連絡する、ということでのんちゃんからの電話は切れた。

杏子は一連の出来事を、彼女に何も話していなかった。

居酒屋で騒いだあと、送ってもらったときにいろんな話したことも、相談があると言って会ったことも、そのとき自分がついた嘘の告白のことも、何も。

のんちゃんからの電話を切った途端、次の電話が入った。

「あの…俺」

「お兄ちゃん？」

「お、今日はすぐに分かってくれたね、良かった、良かった」

「どうしたの？今、のんちゃんから次のサークルの電話連絡ももらったところだよ」

「そう、次のサークルが決まったから。だから…」

「だから、どうしたの？私なら大丈夫だよ。もう敬語遣って話したり、変な態度とったりしないから」

「それは分かっている」

「じゃ、何？」

杏子は少しじれったそうに聞いた。

「あの、えっと…あの話どうしたかなと思って。ほら、あの時話してくれた彼の話」

お兄ちゃんの話は、しどろもどろで何か変だったが、それよりも、杏子はあの相談をしたことをすっかり忘れていた。

もう一度ちゃんと考えるように、言われていたものの、そんなことを考える余裕は杏子になかった。

「あ、あの彼、ね。それならちゃんとしたから。大丈夫」

ちゃんとしたというよりも、あのまま放置している、と言った方が正しかった。

「そっか。それならいいんだ。ちよつと気になっていたから」  
「ごめんね、心配させちゃって」

電話が終わりに近づき始め、どちらかが「じゃ」と言えばそれで切れてしまいそうな状態だった。

しかし、自分が馴れない口を開くと、またこの前みたいに口でもないことになりそうで、杏子は黙っていた。

「あの、明日、海に行かないか？」

少しの沈黙のあと、お兄ちゃんが言った。

「海？サークルで？」

「サークルで、じゃないよ。俺とおまえと二人で」

「二人で？いいけど……」

「けど？けど、何ですか？俺と二人じゃ行きたくないとも？」

「そんなことない、ない。行きます。行かせて頂きます、喜んで」

杏子は、お兄ちゃんの言葉を慌てて否定した。

「そう？良かった。じゃ、明日朝七時に迎えに行くよ」

「うん、楽しみにしてるね」

「寝坊するなよ。じゃあな」

という声が聞こえて、電話は切れた。

杏子はワクワクした。

それは海に行くからではなく、単にお兄ちゃんに会えることへの期待だった。

翌日は、朝から雲一つない快晴だった。

約束の七時に近づき、家の外を見ると、もうお兄ちゃんの車は止まっていた。

「おはよう」

と挨拶し、杏子は車に乗り込んだ。

「おはよう、寝坊しなかったな、偉い、偉い」

お兄ちゃんからは、そんな声が返ってきた。

「どこの海に行くの？」

車が動き出したのを見計らって、杏子は聞いた。

「ちよつと遠い海だよ」

「ちよつと遠いって、よく分かる話だね」

杏子は笑った。

その後も、今から行く海の話や、サークルの話で会話は続いていた。

嘘の告白をしたときのように、空気がよどんでいたらどうしようと思っていた杏子は、その会話をひとまずホツとした。

会話が一呼吸ついた頃、車は市外の国道に乗っていた。

「この辺りで昼飯買う？」

国道沿いにあるコンビニの前で、お兄ちゃんが車を止めて言った。

「お昼ご飯はいいよ、お弁当作って来たから。飲み物だけで」

杏子が言うとうと

「え？作ってきてくれたの？」

お兄ちゃんは少し嬉しそうに言った。

「うん」

杏子が鞆に入ったお弁当を見せると、お兄ちゃんは怪訝そうな顔で言った。

「毒が入ってるのか？食ったら腹が痛くなるとか？」

「失礼な、そんなこと言うなら食べなくていいよ！」

杏子が怒ると

「ごめん、冗談。じゃ、ジュースだけ買ってくるよ」

と言ってお兄ちゃんは車を降りて行った。

少し経ってから、杏子も彼の後を追った。

ジュース売り場から、すでにお菓子売り場に移っていたお兄ちゃんの手には、缶コーヒーが握られていた。そのコーヒーには「ブラック・無糖」と書かれていて杏子は少し嬉しかった。

「どうした？何か欲しいものもある？」

お兄ちゃんに聞かれたけど、杏子はただ

「ううん、何もないよ」

と言って微笑んだ。

二人は、お菓子を物色しながらしばらくコンビニの中をグルグルした。

「俺、コンビニでバイトしてるんだ」

ポテトチップスを手に取りながら、お兄ちゃんが言った。

「だからこの前、サークルの時、コンビニ弁当買って来てくれたんだね。どこのコンビニで働いてるの？」

「俺んちの一つ前の駅前にあるコンビニ」

「そのコンビニなら知ってる。大学の帰り道だから行ったことがあるよ」

「そっか。また、寄って。おまえは？何かバイトしてるの？」

お兄ちゃんがそう聞いた時、レジの順番が回ってきたので、会話はとぎれた。

『コンビニで買いた物か、こんなことしてる私たちって、周りの人から見たら、絶対に恋人同士に見えるんだろうな』なんて思いながら杏子は一人ニヤニヤしていた。

「おい、行くぞ」

と、お兄ちゃんに声をかけられるまで、杏子は一人ニヤニヤしていた。

まるで小学生の恋だ。

車に戻ると、お兄ちゃんは黒い方の缶を杏子に差し出して言った。

「はい、おまえはこっちなね、ブラックコーヒーの格好いいお姉さん」

「ありがとう」

杏子は、笑いながらそれを受け取った。

二人を乗せた車はゆっくり北上を始めた。

朝早く出て来たものの、海に到着したのは昼前だった。

靴を取ろうと杏子は後部座席を振り返った。その時、段ボールに入った大量の本が目に入った。

「ね、お兄ちゃん、この本、何？」

「何って、今から読むんだよ」

「今からって、海で読むってこと？」

「うん、海は本を読む場所だからね」

そう言うとお兄ちゃんは、後部座席に置いてある、ぎっしりと本が詰まった段ボールを持ち出し、車のドアをお尻で閉めた。

『変な人：何で、海に行くのに本なんて持って来るかな？それもあんなにたくさん』と杏子は思ったが、それを口に出すのはやめた。

お兄ちゃんは先に砂浜に行き、ビニールシートを広げながら言った。

「お弁当、早く食べないと。夏はすぐに腐っちゃうから」

「腐ってもいいじゃない。毒がすぐに入ってるんだし」

と憎まれ口を利きながら、杏子はお弁当を開いた。

「美味しそう。本当におまえが作ったの？」

お兄ちゃんは、杏子のお弁当に目を見張った。

「そうだよ。一部お母さん作もあるけど」

「一部おまえ作で、ほとんどがお母さん作じゃないの？」

「二度も三度も失礼な人だね。私は大学で栄養士になる勉強してるの。だからこのくらいは作れるよ」

「栄養士って栄養のことは考えるけど、料理は出来ないとか？」

「もう！だから違うって。栄養士の資格を持つてるものは、調理師の資格を兼ねるのよ。つまり、栄養士は調理も出来なければいけないの。分かった？」

「ははは。そんなにムキにならなくても」

「下らないこと言ってるので、早く食べたら？」

杏子はふくれながら、お弁当を差し出した。

「旨い！この唐揚げ本当に旨いよ」

「良かった」

杏子は喜んでくれたお兄ちゃんを見て、胸をなで下ろした。

「ホント、すっごく旨いよ。うち、父親代わりにおふくろが働いているんだよね。忙しいでしょ？だから手を掛けたおふくろの味みたいなの、あまり食べたことがなくて。だから、手作り弁当っていうのも久しぶりだよ」

居酒屋の帰りに送ってもらったとき、お兄ちゃんがそんな話をしてくれたことを、杏子は思い出していた。

「俺は理工学部」

「そうなんだ」

杏子はおにぎりをほおばりながら言葉を返した。